

世田谷村日記

石山修武

八月二日 つづき

世田谷に戻り、世田谷村第Ⅲ期建築計画のスケッチ。大体まとまった。それにつけても金の欲しさよ、今まとまった金が手許に無いので大掛かりな事はできない。それでも何にもできないというわけではないから、少しづづ手をかけてゆくしかない。たかが金くらいの事で不自由になるのはイヤだ。

午後三時過より激しい雷。稲妻も見事な位に光って、やっと夏になったと思う。

八月三日

午前十時より学部補講。十五時前まで。十五時より卒論ゼミ。今年のゼミ生というよりも石山研はやっぱりロバが多い。これでは走れないだろう。十七時世田谷へ戻る。目の前の仕事に可能性を発見してゆくしかない。例えばそれらが不充分に見える仕事であるとしてもだ。伊藤ていじ氏の「建築家・休兵衛」読む。飛騨高山の吉島家の当主吉島忠男論である。伊藤ていじ氏が旧家そのものに価値を見ようとしているのは理の当然で良くわかるが、そこに育った建築家を介して結局何を言いたいのかが良く解らない本であった。狷介な情の錯綜が理知を曇らせているような気がする。

八月四日 日曜日

今日でなんとかゲーテのイタリアの旅とお別れしたい。ゲーテ

はローマ周辺で相変わらず動かない。ワイマールへ一向に帰ろうとはしない。風景素描に明け暮れているようだし、エグモント等の著作に没頭しているようでもある。しかし一年程のイタリア滞在を経て己れの天職、芸術家としての表現方法を絞るべきだと言う自覚へと次第に達しているのが知れる。偉いね、四〇才前にそんな境地に達しているんだから。

十八時新宿駅南口でカンボジアの小笠原さんと会う。何と小笠原さんは十二名程の親友に声を掛けて下さったようで、元筋金入り、針金入り風の少し老いてくたびれた風のヒッピー達が続々と南口に集まるのだった。西新宿の渋井さんのビルへ。小笠原さんから皆さんを紹介して頂き、私からはネパールでの計画への協力をお願い。こういうゲリラ的な方法でうまくゆくかなと、ようやくにして私も大人の分別が働くようになったが、性分だ仕方ない。正門からゆくルートもちゃんと探らなくてはいけないのは百も承知だが、ゲリラにはゲリラの知恵があるからな。打合わせが、すんでからの飲み会は遠慮して世田谷に帰る。

ゲーテは遂にミラノの女性と恋に落ちた。こんなエネルギーユなおじさんが全く女性に関心なく過したわけがないので納得。しかしその女性が花嫁間近の女性だと知り泣く泣く断念した。その断念の仕方が普通のオジさん風で可愛いもんだ。やはりその辺りの表現には嘘があるような気がする。ゲーテの長い紀行文中、ワイマールに残してきた人々へのひどく抽象的なメッセージが多く記されているが、ここにも多くの嘘が隠されている筈だ。多感多情な人物らしいから書けぬ事も多かつたのだろう。又、終章に近くようやくゲーテは画家への夢を捨てた。画家になるには年を取り過ぎてしていると正直に述べるようになった。絵も相当に修練したのだが、自分でも上手にならぬのを自覚していたのだろう。視

覚芸術の国イタリアでようやくにしてゲーテは文学という己の天職に戻り、それに努力を絞り込む事を決心したのである。ファウストその他の自身の著作にも言及し始めて、ようやくゲーテ自身の言う北方の常闇の国の民族らしさを發揮し始めている。イタリア紀行はまとめに入って再び我然面白くなってきた。流石巨匠である。紀行文においてすら起承転結の構造を作っている。

八月五日

八時目覚める。実にさわやかな朝である。空気は珍しく乾いて皮膚にべたつかぬ。昨日もゲーテにお別れを言うことができなかった。長いなイタリア紀行は。

突然M氏から電話あり。品川に土地買おうと思っているのだけれど、設計やってくれるかと言う。午後に又電話下さいという事にした。三〇分程考えて、東京で一番のペンシルビルにするのだつたら引受けても良いが、それでなければやらない事に決めた。中国の国際競技設計の第一次審査はクリアしたようで、次の段階にすすめるにはならない様だ。十七時前、地下は三〇℃は越えずに28℃が最高気温である。暑さは峠を越えたようだ。